

日本武道代表団の国際交流における普及活動の意義 —2011ドイツ連邦共和国派遣柔道団の活動に着目して—

濱田初幸*

1. はじめに

21世紀は「グローバリゼーションの時代」と言われているが、日本の長い歴史と伝統に培われた武道のグローバリズムは増加傾向にあり（松永，2006），国際交流を目的とした海外武道派遣事業は数多く実施されているが，そのほとんどが柔道団，空手団など個々の単独団による活動で行われている。各武道単独による報告は見られるが，12団体に及ぶ複数武道団合同で実施された海外交流活動報告は稀有である。筆者はこれまでに中華人民共和国（1984年）を皮切りに，アメリカ，ペルー，エクアドル，ドミニカ共和国（1990年），ベトナム社会主義共和国（2003年），フランス（2005年・2006年），ドイツ（2005年・2008年），香港（2007年），イギリス（2008年），タイ（2010年），スウェーデン（2011年）等に招聘され，柔道を通じて国際交流を行ってきたが，全て柔道団単独による海外派遣活動であった。

1977年に武道奨励のために設立された日本武道協議会には，柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の現代武道9団体と日本武道館が加盟している。1979年に設立された83流派からなる日本古武道協会と日本武道協議会が中心となって，諸外国からの招聘に応じているが，現在は年1回の海外武道合同派遣事業が実施されている。例年，今回と同様に現代武道9団体と古武道流派3団体による12団体で構成され派遣している（2007，日本の武道）。

全日本柔道連盟と講道館が行っている柔道団単独による海外派遣事業は長期・短期含めて14件が実施されている（2010年度・講道館事業報告書）。

これに対して，12団体から構成された武道団が合同で行う海外派遣事業は，筆者の調査によれば日本武道館が毎年実施している事業1件に限られている。

筆者は柔道団の一員として，2011年11月に日本武道館が企画した海外武道合同派遣事業に参加し，初めて他武道団体の代表者と合同で柔道を紹介，指導する貴重な機会を得ることができた。複数の武道団が合同で海外に派遣されて行う活動は，柔道単独で行ってきた活動とは異なる魅力や発信力を有していることを知り，海外武道合同派遣事業の意義を見出すことができた。

筆者が専門とする柔道に着目した視点から，今後の海外武道普及活動において有効となる資料作成を目的として活動実態を詳述し，その意義を総括する。

2. 本派遣事業の趣旨

日本とドイツとの公式な外交関係は江戸時代末期の1861年1月，当時のプロシアと徳川幕府との間に結ばれた日独修好通商航海条約を嚆矢とする。

明治維新後，日本はドイツから法律，医学，化学，軍事，芸術など様々な分野で学び，近代化を推し進めていった。また，明治新政府は莫大な予算を投資して，多数のドイツ人指導者を御雇外国人教師として招聘し，ドイツの文物を吸収する一方，多くの日本人留学生を近代化推進の担い手としてドイツに派遣した。近代化の過程において，日本はドイツの先例に倣い，様々な制度を導入し発展させてきた歴史的背景がある。第一次世界大

*鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系

戦では、敵対関係に陥るなどの時期もあったが、伝統的には日独は良好な関係にあるといえよう(岩村, 2010.)。

2011年は日独における公式な国交樹立から150年の節目の年に当たる。150年に及ぶ両国間の交流の歴史を祝い、更に相互理解を深め発展させていくことを目的として、様々な分野でのイベントがドイツ、日本で行われた。本記念交流事業における日本側の名誉総裁は皇太子殿下が務められ、ドイツ側の名誉総裁にはクリスティアン・ヴルフ前大統領がそれぞれ就任されていることから、日独関係の重要性や本事業が国家的レベルで挙行されていることが示唆される (Sonja, 2011)。

日本武道の統括団体である日本武道館は、日本武道協議会との共催で文部科学省の国庫補助対象事業に採択され日独交流150周年記念事業の一環として、ドイツ連邦共和国デュッセルドルフ市からの招聘を受け、「日本武道代表団」を派遣した。

その主な趣旨は、「この記念すべき年に当たり、日本武道の真髄を披露するとともに、武道体験会、武道交流稽古等を実施し、武道の国際的普及振興を図り、国際友好親善に寄与すること」である。

派遣武道団体は日本武道館常任理事・衆議院議員・高村正彦団長(元外務大臣・法務大臣)を統括責任者として、上述の現代武道9団体と古流武術である柳生新陰流兵法剣術・森重流砲術・竹内流柔術日下捕手開山の3流派、日本武道館事務局等を含め総員73名で編成された。日本武道代表団派遣構成員名簿は、表1・表2の通りである。

3. 出発前のミーティング・稽古

我々、柔道団は武道代表団出発前日(11月8日)に講道館に集合、全日本柔道連盟及び講道館国際部の担当者からレクチャーを受けた後、実施内容に関する打ち合わせ、演武稽古を行った。柔道団6名全員が出発挨拶のため全日本柔道連盟を表敬訪問、小野沢弘史全日本柔道連盟専務理事から本事業の使命、意義について説明を受け、日本代表

としての重責の自覚、さらに柔道家としての誇りを持って行動するよう指示を受けた。また、小野沢専務理事の海外指導での体験から、同行する他の代表団武道家との交流を図ることも、これから幅広く指導者として成長するためにも大切であると語られ、貴重な助言を頂いた。藤田真郎講道館国際部部长からも、注意事項やこれまでの派遣事例における詳細な内容に関する講義を受けた後、昨年メキシコ合衆国で開催された柔道演武会のビデオを鑑賞し、今回我々が演武する内容について討議した。若手団員からも積極的な意見が進言され、海外指導経験豊富な藤田国際部部长からの助言を参考に活発な討論の結果、各個人の得意技、個性を活かしたプログラム案が構成された。

作成したプログラム案を稽古するため、講道館小道場に移動し、全員が柔道衣に着替え、構成内容に沿って演武稽古を行い、より効果的な内容にするために修正を重ね、何度もリハーサルを繰り返した。最後に全員が成功に向けて、一致団結することを誓い合って、明日の出発に備えた。

4. 派遣期間

平成23年11月9日～11月16日

5. 派遣都市

ドイツ連邦共和国
ノルトライン・ヴェストファーレン州
デュッセルドルフ市

6. 活動概要

1日目(11月9日) 日本国での結団式・壮行会

早朝に宿泊所の講道館を出発し、集合場所である成田空港第一ターミナル南ウイング4階にて、本派遣団の結団式・壮行会が行われた。壮行の挨拶の中で松永光・日本武道館会長は「日本武道の真髄をドイツ国民に伝え、さらに日本とドイツの友好親善に寄与することを期待する。武道団の安全と本事業の成功を祈念する」と激励の言葉を述べた。

表1 平成23年度ドイツ連邦共和国派遣日本武道代表団 団員名簿

No.	種目	名前	称号・段位	都道府県	職業・勤務先	性別
1	団長	高村 正彦		東京都	(財)日本武道館 常任理事	男
2	団長秘書	高村 治子		東京都	高村事務所	女
3	コーディネーター	ソリドール・マーヤ		千葉県		女
4	日本武道館 プロジェクト 事務局	◎ 吉川 英夫	責任者	神奈川県	(財)日本武道館 振興部長	男
5		渡辺 一彦		千葉県	(財)日本武道館 会計課主事	男
6		端 春彦		千葉県	(財)日本武道館 普及課主任	男
7	柔道	◎ 濱田 初幸	八段	鹿児島県	国立大学法人 鹿屋体育大学	男
8		○ 兒玉 篤	七段	大阪府	常翔学園高等学校	男
9		眞喜志 慶治	六段	埼玉県	(財)講道館	男
10		下山 陽邦	五段	東京都	(財)講道館	男
11		竹澤 稔裕	五段	群馬県	関東学園大学	男
12		市川 祐治	四段	千葉県	京葉ガス(株)	男
13	剣道	◎ 古田 坦	範士八段	山口県	(財)山口県剣道連盟	男
14		○ 山下 和廣	教士八段	石川県	無職	男
15		田邊 重義	教士七段	愛媛県	田辺武道具	男
16		大城 均	教士七段	沖縄県	沖縄県立豊見城高等学校	男
17		塩崎 正昭	教士七段	長野県	長野市立川中島中学校	男
18		鈴木 淳子	四段	千葉県	(財)全日本剣道連盟	女
19	弓道	◎ 坂本 孝英	教士七段	愛知県	なし	男
20		○ 重信 和行	教士七段	宮崎県	公益社団法人 日本食肉格付協会	男
21		工藤 誠一	教士七段	青森県	青森県立鱒ヶ沢高等学校	男
22		本橋 民夫	教士七段	埼玉県	三菱電機特機システム(株)	男
23		平松 賢一	教士七段	新潟県		男
24		三池 真幸	四段	東京都	(財)全日本弓道連盟	男
25	相撲	◎ 石浦 将勝	四段	東京都	日大	男
26		○ 清家 拓丸	四段	東京都	日大	男
27		山下 成樹	三段	東京都	日本体育大学	男
28		神蔵 順規	三段	東京都	日本体育大学	男
29		上田 将平	三段	東京都	農大	男
30		積田 雄大	三段	東京都	拓殖大学	男
31	空手道	◎ 津山 捷泰	範士八段	京都府	小梅(そば処)	男
32		○ 村松 真孝	範士八段	静岡県	社会福祉法人 富士宮福祉会	男
33		阪梨 壘	範士八段	京都府	京都教育大学 非常勤講師	男
34		近藤 剛	範士八段	大阪府	自営業	男
35		西川 吉重	教士七段	大阪府	寝屋川市教育委員会	男
36		竹川 達男	教士七段	東京都	剛柔流空手道聖心館	男

◎は各武道団団長 ○は副団長

表2 平成23年度ドイツ連邦共和国派遣日本武道代表团 団員名簿

No.	種 目	名 前	称号・段位	都道府県	職業・勤務先	性別
37	合気道	◎ 横田 愛明	七段	東京都	(財)合気会	男
38		○ 櫻井 寛幸	六段	東京都	(財)合気会	男
39		鈴木 俊雄	四段	東京都	(財)合気会	男
40		日野 皓正	四段	東京都	(財)合気会	男
41		武田 林大	三段	東京都	AIU 保険会社	男
42		永井 若樹	二段	神奈川県	二松学舎大学	男
43	少林寺拳法	◎ 佐藤 健二	正範士八段	福岡県	無職	男
44		○ 井戸家 正旺	正範士七段	奈良県	自営(井戸家呉服店)	男
45		荒井 章士	准範士六段	香川県	(一般財)少林寺拳法連盟	男
46		梅林 朱梨	正拳士四段	神奈川県	日本体育大学	女
47		中尾 美保子	中拳士三段	東京都	日本体育大学	女
48		加藤 明	大拳士五段	香川県	少林寺拳法世界連合	男
49	なぎなた	◎ 木村 恭子	教士	東京都	国際武道大学	女
50		○ 芦川 寿美	錬士	埼玉県	無職	女
51		梅原 敬子	錬士	神奈川県		女
52		黒川 依子	錬士	千葉県	植草学園大学附属高等学校	女
53		蓮見 可奈恵	四段	埼玉県	(株)キッツウエルネス南古谷店	女
54		石川 ゆかり	四段	茨城県	茨城県立太田第二高等学校里美校	女
55	銃剣道	◎ 佐藤 亨	範士八段	福島県	福島県赤十字血液センター	男
56		○ 相野 照昭	教士八段	青森県	陸上自衛隊	男
57		中島 克直	教士七段	宮城県	陸上自衛隊 仙台駐屯地	男
58		長谷川 元	教士七段	新潟県	新潟県農業総合研究所畜産研究センター	男
59		衛藤 敬輔	教士七段	千葉県	(社)全日本銃剣道連盟	男
60		山口 あや子	錬士六段	福島県	陸上自衛隊 郡山駐屯地	女
61	竹内流	◎ 竹内 藤一郎	宗家	岡山県	岡山商科大学	男
62		○ 芦田 有正	五段	岡山県	自営業(自宅)	男
63		芦田 和正	四段	岡山県	中村建具	男
64		小島 康男		岡山県	農業(自宅)	男
65	柳生新陰流兵法	◎ 柳生 耕一	第22世宗家	愛知県	自営業(剣道師範)	男
66		○ 坂 保行	抜刀・目録	愛知県	無職	男
67		鈴木 英雄		愛知県	無職	男
68		霞谷 努		神奈川県	TIS(株)	男
69	森重流砲術	◎ 角替 進	日本ライフル 射撃協会 種子島銃2段	静岡県	角替土木	男
70		○ 石井 和己		千葉県	千葉県船橋警察署	男
71		片山 直巳	日本ライフル 射撃協会 種子島銃一級	静岡県	(株)白井煙火	男
72		布川 誠				男
73	記録	後閑 信弥				男

それを受け、統括責任者である高村正彦団長は、冒頭、壮行会に出席して頂いた関係者に謝辞を述べ、次いで「錚錚たるメンバーに会えて心強い限りです。日頃鍛えた技と心をドイツの皆様披露し、日本との絆がさらに深まるための活動を行って来ることを誓う」と、我々武道家の身を引き締め、奮い立たせるような名口調で力強く挨拶をされた。続いて、団員一人一人による自己紹介の後、臼井日出男日本武道館理事長の発声により、日本武道団派遣の成功を祈願して乾杯が行われた。昼食を兼ねた小宴の後、全員で記念撮影をし、午後1時10分、ルフトハンザ航空便で空路、乗継地であるミュンヘンに飛び立った。

約12時間のフライト時間を経て、ミュンヘン空港に現地時間18時前に到着した。当初の予定ではデュッセルドルフ空港出発時刻は現地時間19時00分、乗継時間、約1時間の予定であったが、濃霧による悪天候のため飛行機が飛び立つことができず、視界良好になるまで狭いロビーで待つことになった。同行添乗員が必死にドイツ空港関係者と交渉するが、自然現象によるトラブル故に、慌てても仕方がなく、天候が回復するのをひたすら待つしかなかった。しかしながら、十分な天候回復が見込めないことから当初の予定を急遽変更、73名の団員を半数ずつ2班に分け、先行班はデュッセルドルフ空港に向かい、残りの後発班は、遅れてケルン空港に飛び立つことになった。後発班の出発時刻は深夜12時を過ぎていた。

その間、空港ロビーで待たされること約6時間、団員の誰一人として動揺したり不平不満を訴える者もなく、泰然とした行動を堅持し冷静に対応する振る舞いに接し、さすがに各武道団体から選抜された精鋭武道家たちであると感心し、筆者自身がこの集団に属していることを誇りに思う機会になった。

筆者は後発班でケルン空港に到着し、預けた荷物をターンテーブルからピックアップするために待機していると、突然我々よりも早くデュッセルドルフ空港に向かったはずの先発班の団員たちが

続々ゲートから現れ出て来た際には、「我々より先に別の空港に向けて出発した彼らが、なぜここにいるの」と時差ボケか、夢でも見ているかの様に我が目を一瞬疑ってしまった。先発班の一人に尋ねると、濃霧のためにデュッセルドルフ空港に着陸することは危険と判断し、比較的視界良好であったケルン空港に引き返したとのことであった。ケルン空港で合流することになった一行は、待機していたバスにて、デュッセルドルフ市内へ向かい、宿泊先のホテル・ニッコー・デュッセルドルフに到着した時には、午前3時前になっていた。ハプニングに見舞われたドイツ入国となった。海外派遣では、このようなトラブルは珍しいことではないが、今回の代表団員の取った沈着冷静な行動、対応は模範事例として伝えていかなければならないと考える。

2日目(11月10日) デュッセルドルフ日本国総領事及びデュッセルドルフ市長への表敬訪問

午前中、休む間もなく高村団長、各武道団代表12名と記録班、通訳など20名はホテルに隣接する在デュッセルドルフ日本国総領事館を表敬訪問した。小井沼紀芳総領事から、『ノルトライン・ヴェストファーレン州概況』と『図で見るノルトライン・ヴェストファーレン州経済』と題した2部の資料が配布され、ドイツの一般事情、政治、経済、文化、歴史と多岐にわたる分野の講話があり、また日本とノルトライン・ヴェストファーレン州(以下、NRW州)との関係について丁寧な説明がなされた。

小井沼総領事の説明から主な内容を抜粋すると、ドイツ総人口は約8,200万人、連邦を構成する16州の内、NRW州は第1位の人口を有し(17,872千人)、経済を含めドイツの根幹をなしている州である。州都はデュッセルドルフ市(人口584千人)、その他の主な市はケルン市(人口995千人)、ドルトムント市(人口584千人)、エッセン市(人口579千人)、ボン市(人口317千人)などがある(2010年12月現在・デュッセルドルフ総

領事館提供資料)。州都近郊には欧州最大級の日本人コミュニティーが形成され、500社を超える日系企業が拠点を構え、NRW州には12千人を超える日本人が在留している(2010年10月,前掲資料)。記念交流事業の一環として2010年から2011年10月までに開催された日本紹介行事・「日本デー」には、延べ約70万人が参加したとのことで、日本への関心が高い地域であり、特に「すし」を始め「マンガ」、アニメの衣装をまとった「コスプレ」など日本の若者文化への興味関心が高く、宿泊先ホテルの前には、「すし店」、「焼鳥屋」から「ラーメン店」、「日本人向け弁当」、「おにぎり専門店」などが軒を並べていて、日本食には困らないなど多くの情報を教示してくれた。最後に、「ドイツは武道への関心が高く、柔道、合気道、空手などのクラブが多くあり、武道を通じてドイツの方々と交流を深めてください。150周年の節目に日本の武道を紹介することに意義がある」との挨拶が述べられた。次いで、高村団長から小井沼総領事に対して、派遣受け入れの労を取っていただいたことに感謝の辞が述べられ、日本武道館発行書籍33冊の贈呈が行われ目録が手渡された。

総領事館での挨拶を終えた後、次の表敬訪問先であるデュッセルドルフ市庁舎へ向かい、ディルク・エルバース市長の歓迎を受けた。身長2メートル余りある大柄な市長が、デュッセルドルフ独立に関する歴史に触れられ、応接室に飾られた油絵を注視しながら、13世紀後半のケルンとの戦いに勝利した様子が通訳を介して分かりやすく、誇らしげに語られた。最後に高村団長から日本からの贈り物として「兜」の置物と、英語版で記された『日本の武道』が贈呈された。その際、高村団長は以下の内容の挨拶を述べた。

「ヨーロッパ経済を見ると、ギリシアの経済不安が、ユーロ圏の国々に暗い影を落としていると聞いている。その中であってドイツにはヨーロッパ諸国の雄として、強いリーダーシップを発揮してユーロ圏復活の原動力となっていたほしいと念願している。日本には「勝って兜の緒をし

めよ」ということわざがある。戦国武将が、戦に勝った時でも油断せず、「兜の紐を締め直せ」という戒めであり、武道でいう「残心」に繋がる言葉である。当地を訪れた記念に兜を持参したので、武道団の心意気として、また、両国友好の証としてお受けいただきたい」と力強く話された。

この日独交流派遣の意義を再認識したばかりでなく、我々武道家の士気を一層鼓舞する挨拶でもあった。この間、他の代表団員は午前中に市内を巡った後、郊外視察を行い、ドイツの歴史や文化を学び見識を深めた。

○デュッセルドルフ大学での武道文化セミナー

午後、武道セミナーが開かれるデュッセルドルフ大学に向かった。本派遣団帯同通訳でドイツからの留学生ソリドール・マーヤ(現:国際武道大学大学院研究生,早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士課程修了・空手道三段・柔道二段)は、この大学の卒業生で、日本文化学科研究科を修了した経歴を持つ。マーヤにとっては母校への凱旋帰国となった。

セミナー会場は大学敷地内建築棟1階にある大講義室ホールが割り当てられた。ホール全体は扇形で300名程度が収容可能な机付座席が備えてあり、演武場は正面ステージ上に日本サイズで20畳程度の畳が敷かれている狭い場所に設置されていた。到着すると、それぞれ道衣に着替え、指定された順にリハーサルを行った。ドイツ語でアナウンスするための演武解説原稿を作成し、通訳のマーヤに手渡した。柔道団の骨子は、「礼法」、「受身」、「基本技術」等に関することを記したものであった。国際武道大学で女子柔道部に所属し、有段者であるマーヤは、記述した内容を全て理解していて、通訳への演武内容の説明は不要であった。

演武時間は各武道団体5分と厳しく制限され、リハーサル時からタイムキーパー役がストップウォッチ片手に制限時間を超えていないか計測するなど本番同様の緊張感が漂っていた。短時間で

どの内容をどれくらいやるか、披露する技の精査を余儀なくされ、苦心惨憺している武道家も見られたが、柔道団は講道館での事前稽古が功を奏し、やや修正するだけで順調にリハーサルを終えた。

海外指導では、飛行機などの乗り物に限らず、道場施設、周辺環境等予期せぬトラブルは日常茶飯事に生じることを想定して臨み、武道の勝負同様、その場の状況に応じた瞬時の判断力、決断力が必要とされる。国内においても同様ではあるが、特に文化、慣習、宗教等が異なる海外にあっては高い専門技能を有していることは勿論、臨機応変に対応する人間力が求められることは不可避と言える。

演武順序は弓道を筆頭に、少林寺拳法、剣道と続き、柔道は最終演武で柳生新陰流兵法剣術の前、11番目の登壇であった。

武道セミナー開始時刻は午後7時、受講対象はデュッセルドルフ大学日本文化学科専攻学生、大学教員、武道愛好家、日本文化に関心がある一般市民であった。開始時刻が迫ってくると、学生から高齢者まで幅広い年齢層の老若男女が徐々に詰めかけ席に着いていたが、誰もが互いに会話することもなく、鋭い眼光で正面を見つめたまま、なぜか緊張したような面持ちで静かに開演を待っているドイツ人が多く見受けられ、独特の雰囲気醸成していた。

開始式の冒頭、高村団長は次のような挨拶を述べた。

「日独友好150周年を記念し、武道セミナーがデュッセルドルフ大学との共同で開催することを嬉しく思う。今や武道は世界の共通語となりつつある。サムライやジュードー、イッポンは、そのまま世界に通じる。武道は、一千数百年の歴史を経て、現代に至っている。闘争の技術だったものが現代では、その殺傷性を否定し、本来持っている相手を思いやる心、正義感、克己心、人間形成の道として、その存在価値を高めつつある」。

日本で誕生した武道が今や国際社会で理解さ

れ、単なる武術の領域を超越し、人を育てる教育効果の高い運動文化であり、さらに世界の共通言語として通用する日本を代表する文化として受容され、世界に認知されている実態を強調された。

武道セミナーの講演は、柳生新陰流兵法剣術第二十二世 柳生耕一宗家が「日本武道の美とところ」の題目で一節ごとに日本語でスピーチを行った後に、通訳のマーヤがドイツ語で受講者に紹介した。その主な内容は、冒頭に本使節団派遣の使命の話から、武道誕生の歴史、柳生新陰流の理念である「昨日の我に今日は勝つべし」の意義、ドイツ人オイゲン・ヘリゲル博士の著した『弓と禅』、カールフリート・デュルクハイム博士の著した『肚』から引用した日本人のこころの美しさが語られた。さらに、新渡戸稲造の『武士道』を事例に規範意識や倫理性、自然との調和の必要性、武道修錬による人間性の錬磨、こころの修養に通じる講説が披露された。哲学的で示唆に富んだ高尚な内容に、ドイツ人受講者の聞き入っている様子が見られた。講演終了後には、早速矢継ぎ早に質問が挙がり、予定されていた時間ではもの足りない感があった（写真1）。

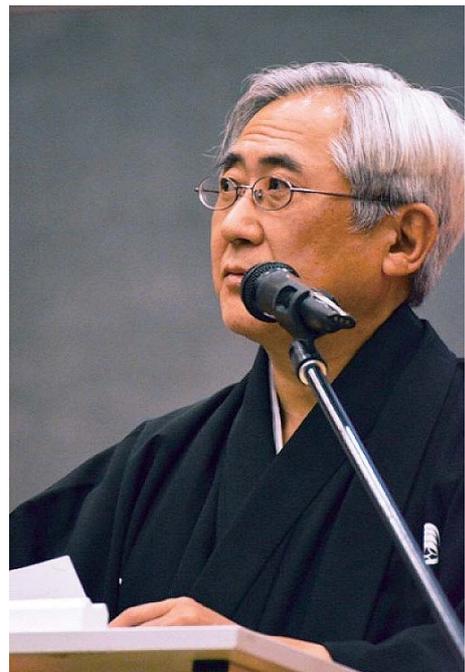


写真1 柳生新陰流兵法剣術 第二十二世 柳生耕一宗家の講演

受講者からの質問には、「武道と武士道の違いは」「何歳から武道を始めたか」「なぜ人を攻撃するのか」など、よく聞かれる質問から、異文化の差異から生じる予期せぬ質問も飛び出した。柳生師範は、どの質問にも穏やかに優しく応じ、その表情から師範の品格の高さが窺えた。また、高村団長自身が少林寺拳法5段の有段者であり、武道論への造詣が深いことから、質問者に対して自らの経験や武道の価値について補足説明をされたのが印象的であった。

次に、各武道の演武解説と実演が披露された。限られた時間の中で、狭いステージ上での演武と十分な環境が整っている状況ではなかったが、どの武道とも工夫を凝らした内容で迫力ある演武を披露した。柔道演武は、柔道経験のない初心者を対象とした内容で構成した。最初に日本武道固有の礼法の内、「座礼」の意義や方法についてごく簡単に解説、実演して見せたが、聴衆が理解しているのか、やや不安が残るものであった。次いで、受傷事故防止に繋がる受身の解説と実演を行った後、手首を使って相手のバランスを奪う技術である「崩し」の動作を説明し、「体の小さな者でも、大きな者を投げることができる柔道の原理」を説いた。直ぐに実践の動きの中で「崩し」を強調した「背負投」「体落」「大外刈」等の技を披露して見せた。さらに、「抑込技」「絞技」「関節技」を紹介し、最後に投技の「一本」「技有」「有効」の違いに関して、審判動作を交えながら平明に解説



写真2 武道セミナーを終えた武道団

した。

制限時間に追われた感がある演武であったが、終了後の拍手、サインや写真撮影を求められる団員の姿を見ると、それなりに評価してもらったものと捉えている。予定時刻の午後9時をやや過ぎた頃、高村団長の閉会挨拶で武道セミナーを無事終えた（写真2）。

3日目（11月11日）ボン・ケルン視察及び日本国総領事館公邸にて歓迎会

第二次世界大戦後から1990年まで西ドイツの首都として発展したボンを視察した。ライン川に沿って開けた都市であるボンは、ベートーヴェンが生まれた街として有名である。音楽に造詣のない筆者ではあるが、ボンで誕生したベートーヴェンの業績についてはわずかながらの知識があり、彼の生家である「ベートーヴェン・ハウス」記念館を視察する機会を得、見聞を広めることができた。ボン市庁舎前のマルクト広場では、ちょうどカーニバル真っ只中で、それぞれが独自の個性あふれる衣装に身を包み、音楽に合わせて踊り、賑やかで陽気なお祭り好きなドイツ人の一端に触れることができた。

午後からはNRW州最大の都市、ケルンを視察した。有名なケルン大聖堂は、157mにおよぶ塔の高さを誇り、訪れる人々を圧倒する迫力がある。この街には、ドイツ体育界の牽引的存在であるケルン体育大学がある。筆者は2005年に文部科学省の海外先進教育研究実践支援プログラムに採択され、この地ケルンに4か月間滞在し、柔道に関する研究を行った。今回はケルン体育大学を再訪することはできなかったが、大勢の武道家たちとケルン市街を懐かしく散策した。

夕刻からは在日本総領事館公邸に招待され、歓迎会に出席した。主催者の小井沼総領事から、ユニークな歓迎の挨拶を頂いた。冒頭に2011年3月11日の未曾有の災害に触れ、被災者、被災地に対して哀悼の意を述べられた。次に「本年は日独通商条約締結150周年の記念すべき年に当たる。ま



写真3 在日本総領事館ドイツ公邸



写真4 公邸パーティー会場

た、本日は2011年11月11日と1が6個並ぶ珍しい日です。このような日に皆様をお迎えでき、大変光栄であります」と語られた。招待されたドイツ側要人の紹介の後、高村団長が謝辞、乾杯の発声の後、開宴となった。広い公邸パーティー会場にはシェフが振る舞った、ドイツ料理から日本料理までバラエティーに富んだ料理が振る舞われ、武道団全員がグラス片手に大いに招宴を楽しんでいる様子が見られた。我々柔道団員は、少林寺拳法、合気道の団員と手首の関節の取り方など各武道それぞれの技術や理論を論じ合い、大いに盛り上がった。特に少林寺拳法初老の団長が施した「小手返し」に、100kgをはるかに超える重量級の柔道団員が悲鳴を上げたが、その技の巧みさは大変参考になった。同様の光景が随所に見られ、各武道団員が垣根を越え入り混じって武道談義で盛り上がり、良き交流の機会を得、情報交換の場と化していた(写真3.4)。

4日目(11月12日) NWR 州武道家たちとの交流会

柔道、剣道、弓道、空手道、合気道、なぎなたの代表団は現地武道団体の要請により、それぞれ分散し、指導及び交流稽古を行った。その他の代表団はデュッセルドルフ日本人学校に招聘され、演武披露とワークショップ(体験稽古会)を行った。

柔道団は6名を2班に分け、兒玉副団長班がデュースブルク柔道クラブへ、筆者班がヒルデン柔道クラブに出かけ、技の解説や乱取稽古を行った。

○デュースブルク柔道クラブにおける交流会

兒玉副団長から下記に記す内容で実施したとの事後報告を受けた。

会場となった交流会柔道場は、NRW州の道場で、他のスポーツも併設する大規模スポーツコンプレックスの1施設であったが、柔道場専用ではなかった。(実際、交流会終了後に直ちに合気道愛好家たちが使用していた。)

交流会参加者は、16歳から20歳の青少年を中心に約40名の参加があった(30歳代のコーチ2名を含む)。参加者は同じクラブの所属ではなく、NRW州約20のクラブからそれぞれ2名が選ばれて参加していた。道場は2面以上取れるほどの広さで、天井には採光、開閉式の窓が備えてあり、とても明るく良い環境であると感じた(同フロアに観客席、更衣室、シャワー室が併設してある)。道場には嘉納治五郎師範の写真が正面に飾られていた(この写真は、当日現地コーチのミスにより、練習中落下、額が割れてしまうアクシデントが起こった)。

練習内容を以下に記す。兒玉副団長を中心としたデュースブルク柔道クラブでの交流会は、下山五段が「背負投」の解説をした後、市川四段が陣頭に立って全員で「乱取稽古」を行い、有意義な指導・交流会であったとの報告を受けた(写真5.6.7)。



写真5 デュースブルク柔道クラブ



写真6 デュースブルク柔道クラブにて合同稽古



写真7 デュースブルク柔道クラブ集合写真

- ・ 紹介, 自己紹介
- ・ ランニング, ストレッチ, 回転運動
- ・ 打ち込み 10分 (動作観察し, 修正箇所を指導)
- ・ 打ち込み時の注意点 (児玉)
- ・ 技の解説 (下山)
背負投をモデルに投技の要点, 体の使い方を解説
- ・ 技研究 10分
- ・ 披露, アドバイス
- ・ 休憩 5分
- ・ 乱取稽古 3分×10本 全員参加

- ・ まとめ 柔道について, 一本に関する解説 (下山)
- ・ 記念撮影

○ヒルデン柔道クラブにおける交流会

筆者が同行したヒルデン柔道クラブは, デュッセルドルフ市内から車で20分ほど行った郊外にあり, 樹木に囲まれた風光明媚な場所に設けられていた。正式名称は「柔道クラブ 71デュッセルドルフ&ヒルデン」であり, ドイツ16州の内, 柔道最多登録人口を有する NRW 州にあって6番目にランクされ, 439名が在籍している (この州で最多登録を誇るクラブは「ボイエラー柔道クラブ」で698名が登録している。2011年1月現在)。柔道以外の武道として空手, 柔術などの部門も含まれている。会長はユルゲン・ナストフォーゲルで, 22名のコーチが在籍している。常設の柔道場が設置しており, スペースも2試合場と十分な安全地帯が確保されていた。この施設の特長として, 中学校・高校の学校敷地内に併設され, NRW 州のカデ・ジュニアを対象とした強化拠点センターを兼ねている。NRW 州柔道連盟から約30名の若手強化選手が指名され, 授業前後に練習できる体制を構築している。クラブ制度が発展しているドイツにおいて, 学校施設内で柔道が練習できる環境は特殊な事例である。同敷地内に寮, 食堂も完備しており選手強化体制が整備されていることから, NRW 州行政教育機関の協力, 理解を得ていることや柔道連盟の競技力向上に懸ける強い熱意を察することができる。

交流会には15歳から40歳までの男女50名が参加し, NRW 州柔道連盟の重鎮で, ドイツ柔道連盟理事でもあるラルフ・リップマンが, 我々のプロフィールを紹介し, 「整列」・「正座」・「座礼」の後に竹澤五段の指揮で, 日本語による号令で我々が通常行う日本式準備運動で体をほぐし, 回転運動, 前回り受身までの基本運動を行った。次いで技術指導に入り, 眞喜志六段が英語と日本語を交えた「大外刈」の解説がなされたが, 特に釣手の動作が独特で, 取 (技を仕掛け, 投げる者) の手



写真8 ヒルデン柔道クラブにて技術指導



写真9 ヒルデン柔道クラブにて技術指導



写真10 ヒルデン柔道クラブにて技術指導

首を返し、受（投げられ、受身をとる者）の頭部を後方に突き崩す技術は非常に高度で、体力に優れているドイツ柔道家がこの技術を習得すると一層日本代表選手を脅かす存在になるのではと思える合理的な技術を紹介した。参加者一同も納得し興味津々の様子が窺えた。次に竹澤五段から「内股」が紹介されたが、受を投げた後も体全体がぶれることなく体軸が安定していて、微動だにしない「残身」の美しさに参加者の賞賛の表情が見

てとれた。筆者は「小内刈」の中で、「その場」、「引き出し」、「横移動（引き手側）」と段階を分けて指導したが、最初に多くの外国柔道家が苦手とする刈足の指先の使い方を詳細に説明した。最後に柔道における足技の重要性を説き、「足技を制する者が世界を制する」とコメントし講習会を締め括った。終了の「座礼」後も、参加者からの拍手が鳴り止まず、指導者一同十分な手応えを感じ有意義な交流会を実施することができた。両班共に、交流目的の骨子である国際友好親善の役割を果たし、無事柔道交流会を終了した（写真8.9.10）。

5日目（11月13日）武道演武大会

本交流記念事業のハイライトである武道演武大会はデュッセルドルフ市郊外、カステロ・デュッセルドルフ会館で行われた。午前8時にホテルを出発した代表団は会場に着くなり、早速2階更衣室に案内され、道衣に素早く着替え、1階メインフロアーに向かった。長方形になっている会場一面の観客席は、弓道や砲術の危険性回避から発射方向側は全面立ち入り禁止にし、3面方向から観衆が見られるように設定されていた。本来4千人収容の会場は、一面を塞いだため当日は3千人が収容可能であったが、開宴前には満員の観客で埋め尽くされた。後日談であるが、これだけの集客を呼び込んだ事業は稀であり、成功のお礼にと会館関係者からケースに入れられたワインのプレゼントが我々の宿泊先に届けられた。

午前中はリハーサルが行われ、代表団全員が集合整列の後、日本人司会者から、「読み上げられた代表団は一斉に手を挙げるように」との指示であったが、通訳のマーヤから「手を挙げて応える動作は、この国では止めましょう」と提言があり、すぐに修正し、「立礼」に切り替えた。ナチス・ドイツ時代を想起させるからなのか、歴史的な背景が窺える場面であった（写真11.12）。

午後2時、司会者のアナウンス（ドイツ語、次いで日本語）を合図に、柔道団を先頭に各武道に

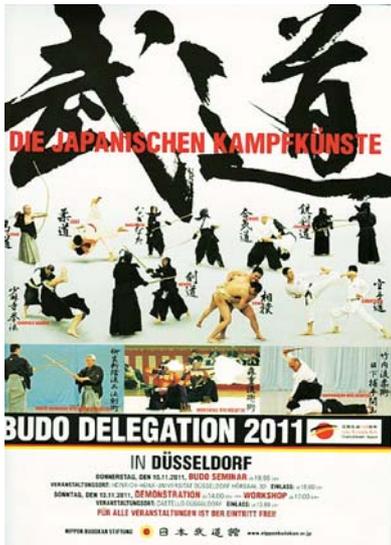


写真11 武道演武大会ガイドブック



写真12 開会式全体

において卓越した技能を有する日本武道代表団が威風堂々とした姿で入場すると、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。各武道団紹介、来賓紹介、両国国歌斉唱が緊迫した中厳かに行われ、次いで高村団長が以下の挨拶を行った。

「このたび、日本・ドイツ連邦共和国国交150周年の記念事業として、ドイツ連邦共和国において、日本武道代表団が日本の伝統文化である武道の真髄を披露できますことを、大変喜ばしく思っています。

貴国との交流は、江戸幕府が開国へ大きく門戸を開き、1861年日独修好通商航海条約が結ばれたことに始まります。以来、両国の交流は続き、日本は明治維新を迎え、政治・経済・文化に至るまでドイツを模範とした体制を採り入れてまいりました。

また、ドイツは商船ロベルトソン号遭遇事件での、乗組員と宮古島島民との温かい物語など、貴国とは政治、経済のみならず、民間交流においても深い繋がりを持っています。

日本の武道は、今から千数百年前に闘争の手段として生まれました。その後、長い歴史の中で技法が体系化され、約三百年前の江戸時代には仁、義、礼、智など、武士の徳を磨く武士道として確立され、今日では心身共にたくましい立派な人間を育てる人間教育の道として、約三百万人の日本国民に愛好されております。

また、海外においても、柔道がオリンピック種目に採用され国際化が加速し、現在、約五千万人が世界各国で武道を愛好しているといわれております。今回参りました代表団のメンバーは、いずれも日本を代表する一流の指導者や選手諸君です。

本日は、現代武道9団体と古武道3流派の磨き抜かれた代表的な演武をご披露いたします。ぜひ皆様に武道の心、日本の心を肌で感じてとっていただきたいと願っています。

終わりに、本事業推進のためにご尽力いただいた関係者の方々に心より感謝を申し上げ、これを機に、日本・ドイツ両国の絆がさらに強固になりますことを心より記念し、ご挨拶といたします。

ドイツと日本の歴史に触れ、両国がいかに古くから結びつきが強いのか、また、新渡戸稲造の『武士道』を引用したと思われる、日本人が美的徳目として継承されている仁、義、礼などを披露し武道修練の中でも、心の練磨の大切さを説かれた。弁舌さわやかに、完結明瞭なスピーチはドイツ人の心を捉え、我々にも深い感銘を与える内容であった。

次にデュッセルドルフ市助役の歓迎挨拶の後、小井沼総領事が、「武道に関心の高いドイツ・デュッセルドルフ市は武道を通して、日本との一層相互交流が促進され、友好親善が深まることを願っている」と述べた。

開会式終了後に、弓道演武から開始された。午

前中のリハーサルでは、的を外す光景も見られた弓道団であったが、本番で放たれた矢は全てが的を射抜く見事な演武であった。次々に各武道の演武が実施されたが、特に盛り上がりを見せたのが、男子剣道対女子なぎなたの異種格闘技の三本勝負であった。2試合を行い、両試合とも1対1の引き分けに終わったが、なぎなた選手奮闘への拍手は一際高かった。本事業ドイツ側武道団責任者でドイツ柔道連盟会長ピーター・フェレーゼからも、「今日の主役は、残念ながら柔道ではなく、なぎなたである」とのコメントが語られた。また、なぎなた代表団は、ドイツ語に歌詞を吹きかえた民謡「蝶々」の音楽に合わせて、「リズムなぎなた」と称した4人による単独基本練習を演武したが、武道の持つ強さのイメージと女性らしさが融合し、緊張感が漂っていた会場もしばらくの間、和やかな雰囲気包まれていた。

柔道界においても基本動作を単独練習で学習させる方法は有意義な稽古法であると考えられる。音楽に合わせて自己身体を移動させ、体を捌くことから動きに無理がなく、過重負荷による受傷事故防止の観点からも有効であり、力に頼らない投技基本動作習得の効果的な指導法として捉えることができる。課題は、武道の品格を損なうことなく、動作が軽すぎて単なるダンスにならないように理論をきちんと説明する必要があるが、工夫を凝らせば来年度から実施される中学校武道必修化に向けた有効な指導法に成り得る。

合気道は、一人の取に受が一人二人と増え、最後は三人を相手に技を披露していたが、受の攻撃に対する取の体捌き、スピード、各技の「極」は見事であった。さらに相撲団員の「股割り」の演武における体の柔軟性の高さに感嘆の声が上がっていた。どの武道にも共通しているのは「礼法」における動作で、十分に「間」をとって「立礼」、「座礼」が行われていることが印象的であった(写真13.14.15)。



写真13 なぎなた演武



写真14 弓道演武



写真15 相撲演武

柔道代表団は前日に実施した武道セミナー同様、最終前に配し、8分間の演武を行った。内容は以下の通りであり、立技を中心に構成した。

- 1, 立礼・座礼
- 2, 前回り受身・人飛び越し受身
- 3, 打ち込み 10本×2set
- 4, 投技・固技 (三組・各技一本から2本程度を施技の後交代)
 - 大外刈 大外刈から支釣込足



写真16 柔道前回り受身



写真18 柔道礼法



写真17 掬投



写真19 送足払

- 背負投 大外刈に応じた掬投
- 払腰 裏投
- 送足払 出足払 体落から腕挫十字固
- 小内巻込から上四方固 浮技 巴投 一本背負投に応じた送襟絞
- 模範試合 (一組・約1分間)

現役時代日本代表として活躍した各団員の得意技が披露され、詰めかけた観衆を魅了した演武会となった。演武中に退席するドイツ人観衆は一人として見当たらず、卓越した武道の奥技を十分満喫している様子が窺えた。特に重量級柔道家が仕掛けた「大外刈」から「支釣込足」に変化する妙は、理合いに叶った合理的な技で観衆を唸らせた。相手を肩より高く持ち上げ回転させて投げる豪快な「掬投」、明治初期に講道館柔道の足技と恐れられた「出足払」、「送足払」の軽快さ、最後に他の格闘技には見られない、自らの体を横に倒れながら技を仕掛ける捨身技に分類される「浮技」、「巴投」には一段と関心が高い様子が窺えた。



写真20 投技の極

団員相互の交代のリズム、メリハリ、機敏な移動動作や技の構成がスムーズで、発声も十分で気合が漲り、柔道の魅力、武道が醸し出す「気」までも発していた感がある。柔道代表団員間の相互連携、成功への強い意志とチームの団結力が本番で見られたことは、一人一人の使命感の強さをもたらした成果であると捉えている (写真16. 17. 18. 19. 20)。

演武の最後は森重流砲術で締め括られたが、発



写真21 火縄筒

射された火縄銃の轟音は、詰めかけた館内の観衆を驚嘆させるのには十分過ぎるほどの迫力であった。飛行機でのトラブルにより、用具が届かず武道セミナーでは演武紹介ができなかったが、本番には間に合い、身に纏った鮮やかな陣羽織の衣装からも中世の武士を髣髴させる武道演武終演にふさわしい幕切れで大会を終了することができた(写真21)。

演武終了後は一息入れる間もなく、柔道、相撲、なぎなた、剣道団員は地元ちびっ子たちとの触れ合いの一時を過ごした。柔道体験学習と銘打たれたこのコーナーは、真っ白い柔道衣を着て、黄色・橙色や二色に染められた「だんだら帯」など鮮やかなカラー帯を締めているドイツちびっ子柔道家たちと、投げたり、投げられたりしながら柔道を楽しみ、若い世代との交流を深めた。

○ワークショップ

演武大会終了後、先ほどとは異なる多くのちびっ子柔道家たちが2階席から続々と降壇し、先ほどと同様に我々柔道団6名を相手に、乱取稽古を行った。柔道の本場から来た団員と稽古する機会は、またとない好機であり、勢い良く我先に飛び掛かってきた。諸外国においては、このちびっ子柔道家たち同様に成人柔道家においても、日本柔道家と少しでも多くの稽古をするために勇んで掛かっていく光景をよく見かけた。柔道創始国である我々日本の柔道家は、成人であれ子供であれ、諸外国の柔道愛好者と真摯に稽古をし、垣根



写真22 ワークショップ後の記念撮影



写真23 柔道団集合



写真24 会場前全武道団集合

を作ることなく接してやるのが武道の発展や異文化理解に繋がり、国際交流の懸け橋になるやもしれない。そんな思いで、30分間のワークショップを終えた。稽古を終えたちびっ子たちには、全日本柔道連盟・講道館から頂いた記念のTシャツやキーホルダー、小タオルを一人一人に握手をしながら手渡し、交流を深めた(写真22)。

閉会式で高村団長は「ドイツにはドイツの、日本には日本の伝統文化があります。国際交流とは

お互いが自国の文化を誇りに思い、他国の文化を認め、尊重し、敬意を払うことから始まる」といった趣旨の内容を語り、最後に関係者への謝辞を述べた。派遣期間中における高村団長の挨拶、言葉には含蓄があり、これから次世代を背負って立つ若き日本の武道家たちに、この言葉、メッセージを伝えてやりたいとの思いや年長者としての使命感が筆者自身の心中で芽生えたことが、今回執筆の原動力ともなった(写真23. 24)。

6日目(11月14日) 郊外視察・解団式

ドイツ最後の日は、郊外視察を実施した。世界遺産にも登録されているローレライ伝説や数々の古城に彩られたロマンティック街道を見学した。ライン川流域に沿ってバスで下り、モーゼル川との合流地・コブレンツからブドウ畑の景色を満喫しながらリュエスハイムまで足を延ばしたが、その間現地ガイドの説明により、ドイツの歴史を学び見識を高めることができた。

郊外視察から帰り宿泊先ホテルにおいて、午後7時から解団式が行われた。高村団長からの「皆様の力いっぱいの武道演武を、ここドイツで披露できたことを心から感謝申し上げます。当初の目的を達成することができました」と労いの辞が述べられ、本派遣事業が成功であったことを総括された。代表団員は重要な任務を全うした充実感からか大いに盛り上がり、ドイツ最後の夜を満喫している感が窺えた。閉会に際し、今回の派遣事業で多大なお力添えを頂いたピーター・フェレーゼ・ドイツ柔道連盟会長に、高村団長から感謝の意を込めて「日本人形」が贈呈された。最後に、弓道・坂本孝英教士七段による一本締めで解団式が終了した。

7日目・8日目(11月15日・16日) 帰国

午前10時、デュッセルドルフ空港で小井沼総領事はじめ関係者の見送りを受け、フランクフルトを経由しドイツを発った。帰りの道中は一切のトラブルもなく、16日午前8時30分、成田空港に予

定通りに到着した。日本武道団の全日程を終了、全員が無事帰国しそれぞれが帰途に着いた。

7. 総括

上述した活動の結果、複数による海外武道合同派遣事業は各武道単独による派遣とは異なる意義が示唆される。

第1の意義は、集客規模の拡充が挙げられる。本事業の観客動員数の多さにカステロ・デュッセルドルフ会館関係者が驚愕したことからも、複数武道団の効果が窺える。武道の形態も、素手で戦う技能を特色とするものから、多様な武器を用いて格闘する技能まで多岐にわたり混在していることから、これら様々な武道に興味関心を有する人々を一堂に集結させることが可能となり、集客数の増加が期待できる。諸外国武道愛好者の価値観も多様で、競技性や護身術重視の観点から、あるいは精神性や日本文化の一端として関心を示す者まで様々な捉え方が見られるが、これまで見聞したことがない未知の武道に触れる機会を提示することにより、他武道への関心も高まり普及拡大に繋がることが考えられる。

第2の意義は、各武道代表団員の資質向上に寄与することが挙げられる。団員相互が専門外の武道の特性、また差異を知ることにより、自武道に優れた技を導入する機会を得て、各武道技能の高度化、さらに活性化に繋げることができる。さらに、武道固有の精神性においても各武道に若干の価値観の相違が見られ、相互間で議論することで自武道の長所、短所を認識し、指導者資質向上のための研修環境の場となり得る。上述したミュンヘン空港で起こったトラブル対応などからも、他武道と活動を共にすることで改めて武道家としてのあるべき姿勢、原点を認識した事例からも窺える。

第3の意義は、武道国際化推進に向けた情報交換の場に成り得る。各武道団員と議論する中で海外普及を望む声が多く聞かれた。究極目標としてはオリンピック正式種目として採用されることを

切望している複数の団体も見られた。一方、柔道を例に挙げ、武道が国際化することによって本来のあるべき姿から変容していると批判的に捉え、オリンピック種目として採用されることを期待していない意見を持つ代表団員も見られたが、多くの武道団は国際化推進に向けた活動を強く望んでいる傾向が見られた。各武道における国際加盟国数は、柔道200国・地域（山田，2010）、次いで空手道の173国・地域、相撲77国・地域、剣道47国・地域、合気道42国・地域、少林寺拳法31国、弓道17国、なぎなた13国である（魚住，2008）。この数値からも、武道の中にあつて、柔道の国際化が顕著であることは周知されているが（坂上康博，2010）、他武道においても国際化推進を強く希望する団体が存在し、柔道団の国際化に向けた推進方法や活動内容について質問される機会があり、国際普及活動の情報交換の場として有意義であると認識することができた。柔道界にあつては、国際化の良き模範として、その責務と使命を自覚した国際交流活動推進を図らなければならないと考える。

今後の課題としては、出発前の事前ミーティング、稽古時間の確保、演武会等における持ち時間の延長、各武道における代表団員の選抜方法、受講生や参加者、団員からのアンケート調査を実施するなど効果検証の必要性が挙げられる。

武道を通じた国際的な普及活動は国際相互理解を促進し、我が国の国際的地位向上にも貢献することができる極めて重要な事業であると考えられる。こうした海外武道合同派遣事業が国家レベルにおいて拡充、活性化され、我が国の伝統文化である武道を世界に発信し、受容され、国際貢献に寄与することを強く望んでいる。

引用文献

- 1) 外務省情報文化局編集（1978）、日本とドイツ連邦共和国、（財）世界の動き社：p.24.
 - 2) 濱田初幸（2012）、平成23年度ドイツ連邦共和国派遣日本武道代表団 柔道団報告、柔道、2012 vol.83 No.2：83-87.
 - 3) 岩村偉秀（2010）、ドイツ人の価値観－ライフスタイルと考え方－、三修社：p.4.
 - 4) 松永光（2006）、日本の心－塩川正十郎対談集－、（財）日本武道館、三友社：p.47, p.62.
 - 5) 松永光（2007）、日本武道協議会設立30周年記念 日本の武道、（財）日本武道館、三友社：p.396, pp.421-422.
 - 6) 坂上康博（2010）、海を渡った柔術と柔道、青海社：p.9.
 - 7) Sonja Blaschke（2011）、日本とドイツをつなぐ 150年－日独交流150周年－、M&K GmbH, p.65.
 - 8) 魚住孝至（2008）、武道論集 I 武道の歴史とその精神（増補版）、国際武道大学 武道・スポーツ研究所：p.34.
 - 9) 渡邊一彦（2011）、日独交流150周年記念事業 ドイツ連邦共和国派遣日本武道代表団 武道を通じて日独の国際交流を図る、月刊武道2012.1, vol.542：244-251.
 - 10) 山田利彦（2010）、世界柔道選手権2010東京大会観戦記、柔道、2010, vol.81 No.11:82.
 - 11) 在デュッセルドルフ日本国総領事館（2011）、ノルトライン・ヴェストファーレン州概況：pp.1-4.
 - 12) 在デュッセルドルフ日本国総領事館（2011）、図で見るノルトライン・ヴェストファーレン州経済：pp.1-5.
- ※注：本論文は『柔道』2012年2月号に掲載された「平成23年度ドイツ連邦共和国派遣日本武道代表団 柔道団報告」を大幅に加筆修正したものである。